# 熊本県菊池郡大津町方言における待遇表現

渡　辺　千　尋

## 1.　はじめに

現代熊本方言においてはその敬意や場面などによっていくつかの待遇表現が存在し、使い分けがなされている。本稿では、県北部に位置する菊池郡大津町の方言において、どういった待遇表現が現存しているかを調査し、特に助動詞に注目して、それらの形式をもってどのような使い分けがなされているのか、熊本県内の他地域との共通点や相違点、さらに世代を通じての運用の変化・変遷等についても調査を行い、分析する。なお、本稿は著者の卒業論文（平成28年度熊本県立大学文学部）に加筆・修正したものである。

## 2.　先行研究

先行研究としては、敬語形式についても語彙の説明に留まるものが多く、熊本県内の他地域で待遇表現についての調査・分析が行われた例はあるものの、こと県北部を取り上げたものは管見の限りないと思われる。そのため、特に本稿に関係のありそうな熊本県内他地域の先行研究を取り上げる。

### 2.1　村上（1997）

熊本県中西部に位置する宇土市網津町旭方言について、70代女性インフォーマントを対象に待遇表現について調査表を用いた調査がなされた結果、以下の待遇表現が確認されている。記述をまとめると、以下のようになる。

○　尊敬表現

助動詞に注目すると「ナサル」「ナハル」「ス・ら＋ス」の3種類の形式が使い分けられている。

「ナサル」…最も敬意が高いが使用される場面が限られる。

ex)　＜あしたは家におられるでしょう＞「アシタワ　ウチ　オンナサッデショー」

「ナハル」…同様に敬意の高い形式でありながら、同輩から親しい目上まで

使用の幅は広い。

ex)　＜あしたは家に居るか＞「アシタ　アタワ　オンナハルカ」

「ス・ら＋ス」…第三者場面に使用され、話題の人物が目上であるときの使用は軽卑語に受け取られる場合がある。

ex)　＜今そこに行っていた＞「イマ　ソケ　イキヨラシタ」

また、調査では回答がなかったが現存する形式として「ル・ら＋ル」が挙げられている。「ス・ら＋ス」と同様に第三者場面で用いられるがより敬意は低く、話題の者が目下や自分の子である場合に使用される。

○　謙譲表現

調査では確認されなかったが、対象方言域においてはいくつか存在しており、「いただく・ちょうだいする」という意味の「ハイリョースル」や「行く・来る」の謙譲語として「アガル」が挙げられている。両形式とも若年層で聞くことは稀である。

○　丁寧表現

動詞に後接する「デス」形式があり、「イクデス」「オルデス」といった形で使用されている。この形式は形容詞や進行態の動詞にも下接できる。

○　文末助詞

「カイタ」「バイタ」といった形式が特徴で、親しい同輩や目下の相手に用いられる。

## 3.　調査概要

ここでは、本稿における調査の対象地域、調査期間、対象インフォーマントについて述べる。

### (1)　調査対象地域

本稿の調査対象地域である大津町は、熊本県の中北部、菊池郡に属する。熊本市から東に約 19 キロメートル、阿蘇との中間に位置しており、国道 325 号線と国道 57 号線が縦・横断しているほか、阿蘇熊本空港や九州縦貫自動車道熊本 IC を近くに持つ、交通条件の良い町である。人口は約 3 万 5 千人で、世帯数は約 1 万 4 千戸である。(平成 29 年 2 月末情報 大津町ホームページ、大津町の紹介より引用)

歴史的には、古くより肥後に属した地域である。昭和 31 年に近隣 6 ヵ町村(大

津町・陣内村・平真城村と瀬田村・護川村・錦野村それぞれの一部）が合併し、現在の大津町となっている。

(2)　調査期間　平成 28 年 9 月～ 11 月

(3)　対象インフォーマント

以下、大津町に在住し、20 年以上居住歴のある高年層、中年層、若年層の計 5 名を対象とした。

A　80 代女性（0 ～ 30 歳 : 熊本県菊池郡大津町真城、31 ～ 32 歳 : 福岡県北九州市、33 ～ 65 歳 : 熊本県菊池郡大津町矢護川、66 ～ 83 歳現在 : 熊本県菊池郡大津町）

B　60 代男性（0 ～ 22 歳 : 熊本県熊本市、23 ～ 40 歳 : 熊本県菊池郡菊陽町、41 ～ 45 歳 : 熊本県菊池郡大津町矢護川、46 ～ 63 歳現在 : 熊本県菊池郡大津町）

C　50 代女性（0 ～ 36 歳 : 熊本県菊池郡大津町矢護川、37 ～ 54 歳現在 : 熊本県菊池郡大津町）

D　20 代女性（0 ～ 22 歳現在 : 熊本県菊池郡大津町）

E　20 代女性（0 ～ 22 歳現在 : 熊本県菊池郡大津町）

本稿においてはインフォーマント A を高年層、B ～ C を中年層、D ～ E を若年層と分類し、分析することとする。

## 4.　調査・分析

### 4.1　使用形式の調査

#### 4.1.1　調査方法

対象の地域で現在使用されている方言の待遇表現の形式を調べるため、藤原（1978,1979）とそれに付録されている図版をもとに当該地域周辺にて使用されていると思われる形式を予め確認した表 1 をもとに、インフォーマント A に対して面接形式の調査を行った。現代日本標準語（以下、標準語とする）の口語文法の活用に沿って作成した表 2 に基づいて、話者に動詞を日常的に使用している待遇表現の形式に翻訳してもらった。

以下、藤原（1978,1979）図版より、当該地域に確認される見込みのある 17 形式をまとめたものが表 1 である。例として取り上げる形式の基準を次のように設ける。

①図版にて当該地域かその周辺に網掛けがなされている。

②当該地域には網掛けはないが、近隣（主に肥筑地方）に網掛けがなされて

いる。または、当該地方を挟む形で飛び地的に網掛けがなされている。

③網掛けはないが、本文中で言及がなされている。

④網掛けはなく、本文で言及もないが、筆者の内省として聞き覚えがある。

ここで②を取り上げる理由としては、図版はあくまで目安であると注釈されていることに加えて、時代の変遷によって近隣地域の方言がその範囲を広げている、ないしそれに当該地域の方言が影響を受けている可能性を考慮したためである。また、これらの形式の他にも話者から別途回答が得られる可能性はあるため、記載のなかった形式が得られる場合も十分に考えられる。

表1　当該地域に確認される見込みのある形式（藤原（1978,1979）参照）

| | |
|---|---|
| 尊敬形 | ゴザル、動詞連用形＋て＋指定助動詞（「来テジャ（ヤ）」など）、～レル・ラレル、シャル、サッシャル、～ナハル、～ナル、ナッス、ナス、イ・サイ |
| 謙譲形 | 「拝領」との言いかた（「読んでハイヨー。」など） |
| 丁寧形 | ゴザッス（ゴザッスル）、ゴザス、ゴイス、ゴザンス、ヤンス、デス |

表2については先述の通り標準語の口語文法の活用に沿って作成している。そのため、「寝る」のように九州方言におけるラ行五段化の傾向がある動詞や、「求める」のように方言として下二段活用が残存し運用されている動詞も上一段活用や下一段活用に含まれているが、本稿の調査結果には影響しないため、標準語に合わせて分類し、使用している。

表2　動詞表

| | 五段活用 | 上一段活用 | 下一段活用 | 変格活用 |
|---|---|---|---|---|
| ア行 | | 老いる | 見える　*2 | |
| | | 居る　*1 | 得る | |
| カ行 | 書く | 着る　*1 | 受ける　*2 | 来る |
| | 行く | | | |
| サ行 | 探す | | 見せる | する |
| | 話す | | やせる　*2 | |
| | 貸す | | | |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| タ行 | 勝つ | 落ちる　*1 | 捨てる　*2 | |
| | 立つ | 散る　*1 | | |
| ナ行 | 死ぬ | 煮る　*1 | 尋ねる | |
| | | | 寝る　*1 | |
| ハ行 | 減る | 干る | 経る | |
| マ行 | 読む | 見る　*1 | 求める　*2 | |
| | 飲む | | 決める　*2 | |
| ラ行 | ある | 下りる　*1 | 入れる　*2 | |
| | | かりる　*1 | | |
| ワ行 | 笑う | | | |
| | 思う | | | |
| | 買う | | | |
| ガ行 | 泳ぐ | 過ぎる　*2 | 告げる | |
| | 注ぐ | | 下げる　*2 | |
| | 急ぐ | | | |
| ザ行 | | 閉じる　*1 | 混ぜる　*2 | |
| ダ行 | | | 茹でる | |
| | | | 出る　*1 | |
| バ行 | 遊ぶ | 浴びる　*1 | 食べる　*2 | |
| | 学ぶ | 伸びる　*1 | | |

*1 方言によるラ行五段化の傾向がある動詞。

*2 方言として下二段活用の運用が残っている動詞。

### 4.1.2　調査結果と分析

表 3-1　使用が確認された形式（五段活用）

| | 五段活用 | [-nar-] | [-nahar-] | 回答 | 他 |
|---|---|---|---|---|---|
| ア行 | | | | | |
| カ行 | 書く | ○ | | kakinaru | |
| | 行く | ○ | | ikinaru | 行くデスか（ikudesuka） |
| サ行 | 探す | ○ | | sagashinaru | 探さにゃんとデスか（sagasanyantodesuka） |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| | 話す | ○ | | hanashinaru | 話しとったデス (hanashitottadesu) |
| | 貸す | ○ | | kashinaru | |
| タ行 | 勝つ | ○ | | kachinaru | |
| | 立つ | ○ | | tachinaru | |
| ナ行 | 死ぬ | ○ | | shininaru | 亡くなんなった (nakunannatta) |
| ハ行 | 減る | ○ | | hennatta/ hennaharu | |
| マ行 | 読む | ○ | | yominaru | |
| | 飲む | ○ | ○ | nominaru/ nominahatta | |
| ラ行 | ある | ○ | ○ | arinatta/ arinaharu | |
| ワ行 | 笑う | ○ | ○ | warainaru/ warainaharu | |
| | 思う | ○ | △ | omoinaru/ omoinaharu | |
| | 買う | ○ | | kainaru | |
| ガ行 | 泳ぐ | ○ | | oyoginaru | |
| | 注ぐ | × | × | | *3 |
| | 急ぐ | ○ | | isoginaru | |
| ザ行 | | | | | |
| ダ行 | | | | | |
| バ行 | 遊ぶ | ○ | | asobinaru | 遊びよラス (asobiyorasu) |
| | 学ぶ | ○ | | manabinaru | |

表 3-2　使用が確認された形式（上一段活用）

| | 上一段活用 | [-nar-] | [-nahar-] | | 他 |
|---|---|---|---|---|---|
| ア行 | 老いる | △ | | oinaru | |
| | 居る | ○ | | onnaru | |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| カ行 | 着る | ○ | | kinaru | |
| サ行 | | | | | |
| タ行 | 落ちる | ○ | | ochinaru | |
| | 散る | △ | | chirinaru | |
| ナ行 | 煮る | ○ | △ | ninaru/<br>ninaharu | |
| ハ行 | 干る | × | × | | *3 |
| マ行 | 見る | ○ | ○ | minaru/<br>manaharu | |
| ラ行 | 下りる | ○ | | orinaru | |
| | かりる | ○ | ○ | karinaru/<br>karinaharu | |
| ワ行 | | | | | |
| ガ行 | 過ぎる | ○ | | suginaru | 過ごしナル(sugoshinaru) |
| ザ行 | 閉じる | △ | | tojinaru | しめナル（shimenaru）と使う |
| ダ行 | | | | | |
| バ行 | 浴びる | ○ | ○ | abinaru/<br>abinaharu | |
| | 伸びる | △ | | nobinaru | |

表 3-3　使用が確認された形式（下一段活用）

| | 下一段活用 | [-nar-] | [-nahar-] | 回答 | 他 |
|---|---|---|---|---|---|
| ア行 | 見える | ○ | | mienaru | |
| | 得る | × | × | | *3 |
| カ行 | 受ける | ○ | ○ | ukenaru/<br>ukenaharu | |
| サ行 | 見せる | ○ | | misenaru | |
| | やせる | ○ | | yasenaru | |
| タ行 | 捨てる | ○ | | sutenaru | |
| ナ行 | 尋ねる | ○ | | tazunenaru | |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| | 寝る | ○ | | nenaru | |
| ハ行 | 経る | × | × | | *3 |
| マ行 | 求める | ○ | | motomemaru | |
| | 決める | ○ | | kimenaru | |
| ラ行 | 入れる | ○ | | irenaru | |
| ワ行 | | | | | |
| ガ行 | 告げる | ○ | | tsugenaru | |
| | 下げる | ○ | ○ | sagenaru | |
| ザ行 | 混ぜる | ○ | | mazenaru | |
| ダ行 | 茹でる | ○ | ○ | yudenaru/ yudenaharu | |
| | 出る | ○ | ○ | denaru/ denaharu | |
| バ行 | 食べる | ○ | ○ | tabenaru/ tabenaharu | |

表 3-4　使用が確認された形式（変格活用）

| | 変格活用 | [-nar-] | [-nahar-] | 回答 | 他 |
|---|---|---|---|---|---|
| ア行 | | | | | |
| カ行 | 来る | ○ | ○ | kinaru/kinaharu | （買って）きてヤリマス（kattekiteyarimasu） |
| サ行 | する | ○ | ○ | shinaru/ shinaharu | |

○…使用可能　　△…やや違和感を持つが使用可能　　×…不可

*3 動詞を知らない、日常的に使用しないと回答。

調査結果は表 3-1 ～ 3-4 の通りである。面接調査の結果、当該地域に現存している待遇表現としての方言は [-nar-][-nahar-] [-as-/-ras-] [-des-] の 4 種類がみられた。回答から、[-nar-] 形式は連用形、[-nahar-] 形式も同じく連用形、[-as-/-ras-] 形式は未然形、[-des-] 形式は終止連体形に接続することがわかる。また、例外的ではあるが [-teyar-] という形式も確認された。これについては後述する。広く候補形式を取り上げたということもあるが、前記の 17 形式からは大幅に

数を減らす結果となった。以下、現存しているこれらの形式について調査結果をもとに分析を行う。

最も多く見られたのは [-nar-] 形式であり、回答を得られた殆ど全ての動詞に後接できた形式である。「(先生が) 黒板に書きナル」のように尊敬の意味で用いられる。[-nahar-] 形式はやや用いることもあるという認識であり、動詞の種類や活用型等での明確な区別の基準は見られない。「(先生が) しナハル」のように [-nar-] と同じく尊敬の意味で使われている表現と言える。これらは尊敬表現であるために主に目上の者に用いられる。この 2 形式が専ら敬語にする際に用いられる基本的な形式と言える。また、話者個人においては、どちらの形式とも目上の者である「先生」に対しても、対等な「友人」に対しても用いることが可能で、そこに敬意による使い分けは意識されておらず、これらの敬意の高低は同程度という認識であった。この 2 形式については、藤原 (1978) にも「第一には、「ナハル」ことばが県下にさかんで、日向にそれのいくらかあったのとの連関·対立を見せている」(p.396 7-8 行)、「「ナル」ことばが、また、当方にもいちじるしくて、この点では、薩隅を出はなれたところで、日向・肥後が、よくつながりあっている。この勢力は、以北の九州に、広くたどられるようである。」(p.396 11-13 行) との記述がなされている。さらに、「本県下に、「ナハル」と「ナル」とが、並び、よくおこなわれているのは、興味が深い。よいことばと、くだけたことばとの、成立・存立の相互関係が、ここに明らかであろう。」(p.297 22-23 行) とあるが、[-nahar-] 形式と [-nar-] 形式が並んで使用されていることに関しては今回の調査結果に著しく表れているとはいえ、これらを「よいことば」と「くだけたことば」との区別がされている点については、当該地域の話者においては敬意の高低による使い分けは見られなかったため相違している。村上 (1997) においても宇土地域での敬意の高低は「ナサル」≧「ナハル」、第三者待遇は「ス・ら＋ス」＞「ル・ら＋ル」とされており、当該地域の調査結果とは相違がみられた。

次に [-as-/-ras-] 形式は、表 1 内には挙げられていなかったが、村上 (1997) では記述があることや筆者の内省がきくこと、話者からも回答が得られたことから現存するとした。村上 (1997) では「天草地方では、面と向かった相手にも使用可能である。」との記述もなされているが、県北である当該地域の高年層においてこの形式が面と向かった相手には適用されず、第三者場面で用いられる。これは一般的な熊本県方言と同様である。例としては「(知り合いがこちらに向かっていると聞き手に教えようとして) あの人は今こっちゃん来よラ

ス」というように用いる。「あの人は今こっちに向かっているよ」という意味であり、「あの人」はこの発話の場にはいないため、第三者場面での使用となる。しかしながら、この [-as-/-ras-] 形式については、インフォーマントAからは“荒い言葉”であるとして、“聞くこともあり理解はできるものの自分ではあまり使用しない”との回答がされている。これはおそらく、[-as-/-ras-] 形式に軽卑語的な意味が含まれる場合があることが原因である。聞き手の立場になった際、そういった捉え方もできるこの形式は、前述の2つに比べて用いる頻度が低くなる。この形式のもつ第三者場面という点においても、前述の2形式も何ら問題なく使えてしまうため、やはり使用頻度が低くなってしまうと考えられる。また、話者は [-as-/-ras-] 形式についてさらに、”自分（話者自身）の親世代（母など）が頻繁に使っていた”と発言した。これは、話し手の友人や夫、先生といった対等ないし目上の者に対してではなく、子である話者（インフォーマントA）を指してであるという事である。残念ながら聞き手側の如何は定かではなかったが、少なくともその話題の人物が子である話者であることは伺えた。つまり、当該地域の現在の高年層の、さらに上の世代（以下、旧高年層と表記する）においては、この [-as-/-ras-] 形式は目下の者に使用する待遇の形式として使用されていたことが推測される。このことを踏まえると、現在の高年層において [-as-/-ras-] 形式の軽卑語的な意味合いの印象が色濃く、”荒い言葉”とされる由縁も伺える。旧高年層で目下への待遇形式とされていたとすれば、そのままいわゆる「下向き」の待遇の意味合いが強まった結果、軽卑語的な意味へシフトすることも頷ける。旧高年層においても目上の者への使用が不適だったとすると、単に「目下の者へ使う言葉」という認識がなされることで、尊敬表現としての意味合いが薄まることもあり得る。それが今回の調査で、高年層における [-as-/-ras-] 形式の使用頻度の低さとして表れている。

[-des-] 形式は、標準語の「私は学生デス」といった形とは異なり、「<先生に対して>私が代わりに行くデスよ」のように動詞の終止連体形＋[-des-] といった用法で使用されている。この形式については村上（1997 ;p.223 22行）で「形容詞や進行態の動詞にも下接」すると言及されており、今回の面接調査においても同様の回答が得られた。藤原（1979 ;p.420）にも丁寧法助動詞の丁寧表現法の一つとして「デス」が取り上げられている。九州地方の「デス」について、「鹿児島県下についても、宮崎県下についても、「デス」の通用が認められる。「何々デス　モンナー。」との言いかたは、宮崎県下に熟しており、また、熊本県下でもそうである。」（p.420 9-11行）との記述はあるが、それ以上

の詳しい記載は見受けられない。動詞の種類や活用型によっての使い分けがみられるかは次節でさらに調査を行うこととした。

最後に、「買う」の欄で回答がみられた「買ってきテヤリマス」という [-teyar-] 形式であるが、これは話者独自の言葉遣いであるとも考えられるため例外とした。しかしながら、それに形態の類似した形式として、西日本諸方言における「テ敬語」が挙げられる。まず、藤原（1978 ;p.535）に九州地方の尊敬法助動詞「ヤル」についての記述がある。この「ヤル」形式はこと九州においては薩隅地方の敬語法体系の中で「一つの大きな柱をなしている」とされ、それを中心に日向地方や肥後南部にもつらなっているという。九州中部以北については「「～ヤル」のおこなわれることがごくすくない。もとは、こうではなかったろう。しだいにおこなわれなくなって、今日のこの状況が見られるしだいなのかと思う。」（p.542 10-12 行）と記述されており、また、「～ヤル」について「「オ～アル」形式の表現法からはなれて、単独の一尊敬表現法助動詞となった」、「多少ともくだけた気もちでの敬意表現にふさわしいものとして、よく、全国的に行われたらしい。」（p.534 18-20 行）との記述もあることから、非常に稀とはいえ当該地域に残存している可能性もないとは言い切れない。さらに、当該地域の一般的な方言として尊敬辞ヤルや本動詞ヤルはないが、小西・井上（2013）では、富山県呉西地方の井波方言における継続相・尊敬の「～テヤ」について、井波方言には尊敬辞ヤルや本動詞ヤルはないが、県最南部の五箇山地方には尊敬辞ヤルが現存するため、五箇山方言の～テヤルのみが～テヤと形態を変えて井波方言に残存した可能性が示唆されており、熊本県南でおこなわれているヤルが～テヤルと形態を変えてそれのみが当該地域に残存した可能性も考えられる。今回の調査で見られた [-teyar-] 形式が「～テ＋尊敬の補助動詞ヤル（ないしアル）」に由来、ないし類似する継続相・尊敬の「～テヤル」であるとすれば、表 1 に示した「動詞連用形＋て＋指定助動詞」の枠に分類される。しかしながら、これらの先行研究に記載されている「～ヤル」については「買ってきテヤリマス」のような用法をとるとは明記されておらず、話者の回答した [-teyar-] 形式と関連を論ずるには不十分であることも事実であり、調査のなかでの回答も一語のみのためこれ以上は定かではない。筆者の内省として耳にする機会もなく、違和感を覚えることからも、少なくとも当該地域にてこの形式を運用している可能性があるのは高年層以上であろうとの推察に留まった。

以上、4 形式についてまとめたものが（X）である。

(X)　熊本県菊池郡大津町の高年層における方言の待遇表現

Ⅰ. [-nar-][-nahar-] 形式は尊敬法助動詞であり、敬意を込める場合、大抵これらの形式が用いられる。敬意の高低は意識されていない。また、動詞による使用の制限はない。

Ⅱ. [-as-/-ras-] 形式は諸先行研究では尊敬表現に分類される第三者待遇である。場合によっては話者の心的態度を表す軽卑語としての側面も持ち、菊池郡大津町で調査したところでは、少なくとも目上に使用されることはない。

Ⅲ. [-des-] 形式は丁寧な言葉遣いとして簡易的に用いられる丁寧表現である。動詞の終止連体形に後接する。動詞による使い分けは不明である。

次節より、(X) をもとにこれら 4 形式のうち、特に [-as-/-ras-] 形式と [-des-] 形式についてさらに調査・分析を行う。

## 4.2　[-des-] 形式

### 4.2.1　調査方法

4.1 節の調査において確認された [-des-] 形式がいくつかの動詞のみで回答されたことに着目し、動詞によって使用に違いがあるのかをみるため、インフォーマント A に対して表 2 の動詞表を用いて [-des-] 形式に絞った面接調査を行った。今回の調査では、4.1 節の調査において「(先生に対して) 私が代わりに行くデス」のような使用がみられた [-des-] 形式について、その他の動詞でも適宜文脈を作ってこの形式が終止連体形に接続できるかを確認した。なお、進行態に接続する回答も見られたが、今回は特に [-des-] 形式の特徴と言える動詞の終止連体形 + [-des-] という形が適用されるかのみに焦点を当てた。

### 4.2.2　調査結果と分析

表 4-1　[-des-] の後接する動詞 (五段活用、上一段活用)

| | 五段活用 | [-des-] | 回答 | 上一段活用 | [-des-] | 回答 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| ア行 | | | | 老いる | ○ | oiddesu |
| | | | | 居る | ○ | orudesu/ oddesu |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| カ行 | 書く | ○ | kakudesu | 着る | ○ | kirudesu/ kiddesu |
| | 行く | ○ | ikudesu | | | |
| サ行 | 探す | ○ | | | | |
| | 話す | ○ | | | | |
| | 貸す | ○ | | | | |
| タ行 | 勝つ | ○ | katsudesu | 落ちる | ○ | ochiddesu |
| | 立つ | ○ | tatsudesu | 散る | ○ | chirudesu/ chiddesu |
| ナ行 | 死ぬ | ○ | | 煮る | ○ | niddesu |
| ハ行 | 減る | ○ | herudesu | 干る | — | |
| マ行 | 読む | ○ | yomudesu | 見る | ○ | mirudesu/ middesu |
| | 飲む | ○ | nomudesu | | | |
| ラ行 | ある | ○ | arudesu/ addesu | 下りる | ○ | oriddesu |
| | | | | かりる | ○ | karudesu |
| ワ行 | 笑う | ○ | waraudesu | | | |
| | 思う | ○ | omoudesu | | | |
| | 買う | ○ | kaudesu | | | |
| ガ行 | 泳ぐ | △ | oyogudesu | 過ぎる | △ | suguddesu |
| | 注ぐ | — | | | | |
| | 急ぐ | △ | isogudesu | | | |
| ザ行 | | | | 閉じる | △ | tojiddesu |
| ダ行 | | | | | | |
| バ行 | 遊ぶ | ○ | asobudesu | 浴びる | ○ | abiddesu |
| | 学ぶ | ○ | manabudesu | 伸びる | ○ | nobiddesu |

表 4-2　[-des-] の後接する動詞（下一段活用、変格活用）

| | 下一段活用 | [-des-] | 回答 | 変格活用 | [-des-] | 回答 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| ア行 | 見える | ○ | mierudesu/ miyuddesu | | | |
| | 得る | — | | | | |
| カ行 | 受ける | ○ | ukerudesu/ ukuddesu | 来る | ○ | kurudesu/ kuddesu |
| サ行 | 見せる | ○ | miserudesu/ miseddesu | する | ○ | surudesu/ suddesu |
| | やせる | ○ | yasuddesu | | | |
| タ行 | 捨てる | ○ | suterudesu/ sutsuddesu | | | |
| ナ行 | 尋ねる | × | | | | |
| | 寝る | ○ | nerudesu/ neddesu | | | |
| ハ行 | 経る | — | | | | |
| マ行 | 求める | ○ | motomuddesu | | | |
| | 決める | ○ | kimuddesu | | | |
| ラ行 | 入れる | ○ | ireddesu/ iruddesu | | | |
| ワ行 | | | | | | |
| ガ行 | 告げる | ○ | tsugeddesu | | | |
| | 下げる | ○ | saguddesu | | | |
| ザ行 | 混ぜる | ○ | mazuddesu | | | |
| ダ行 | 茹でる | ○ | yuderudesu | | | |
| | 出る | ○ | derudesu/ deddesu | | | |
| バ行 | 食べる | ○ | taberudesu/ tabuddesu | | | |

面接調査の結果は表4の通りである。紙面の都合上、表4-1に五段活用と上一段活用を、表4-2に下一段活用と変格活用を分割しているが、結果による分割ではないことを注釈しておく。ほとんどの動詞が○(違和感なく使用できる)との回答で、△(多少違和感はあるが許容できる)という動詞がいくつかみられた程度であった。「尋ねる」のみ、×(違和感がある)と回答された。この調査の結論として[-des-]形式は動詞表の殆どの動詞で用いることが出来、動詞による使い分けの区別はないと考えられる。

唯一非文であると回答された「尋ねる」については、話者は“響きに違和感を覚える、言いづらくておかしい”との認識であった。おそらく動詞表の動詞の中で4モーラと比較的長く、加えて「ず」という濁音が含まれているためといった音韻的な要因である可能性がある。その他の、△と回答された「泳ぐ」「急ぐ」「過ぎる」「閉じる」にも濁音が含まれているため、それとも整合する。同じく濁点の含まれる「下げる」や「混ぜる」は○と回答されたことから確証は得られないが、△や×と回答された動詞全てに濁点が含まれていることはやはり無関係とは考えづらいため、何らかの関係がある可能性は十分にあるだろう。また、話者に確認したところ、これらの動詞の終止連体形+[-des-]という形に違和感が残る動詞は全て、「尋ねヨルデス」のように進行態とすると違和感は排除される。

以上から、結論として高年層であるインフォーマントAにおいて丁寧形[-des-]は、殆どの動詞に下接することが可能であり、使用の基準はさほど明確ではないとみられる。これが高年層一般に言えるのか、はっきりと明言はできないが、比較的簡易に用いることが可能な丁寧形であることを考えると、やはりその使用は動詞の種類にさほど左右されないと言える。

### 4.3 [-as-/-ras-]形式の世代間調査

#### 4.3.1 調査方法

4.1節の調査結果で確認できた[-as-/-ras-]形式について、まずインフォーマントAに対し(i)形としてあるのか、(ii)目下に対する敬語か否かという2点について再度簡易的に面接調査を行った。これらは、「(子どもが)遊びよラス」という形が可能であるとの回答から得られたものであったが、「あそこに(①先生が/②お父さんが/③子どもが)おラス」という3つが適用されるかとの質問に対して、どれも不適という回答であった。これは、おそらく前回調査で回答された「(子どもが)遊びよラス」という形は話者の心的態度であ

るところの軽卑語的な意味あいが含まれたものであり、「<酒をよく飲む弟がまた酒を飲んでいるのを見て>また酒ば飲みよラス」というような文脈と同じ用法であったためと推察できる。つまり、待遇表現として上向きというよりは下向きの、「非ていねい」的な運用であったと考える。

しかしながら、筆者の内省として [-as-/-ras-] 形式は敬語的な上向きの待遇表現としても当該地域に現存していると予想された。そこでこの形式の、高年層以外での使用実態も調査する必要があると考え、[-as-/-ras-] 形式について高年層、中年層、若年層の世代間の使用実態を調査するために、インフォーマント B~E に対しても面接調査を行うこととした。今回の調査は、第三者場面で使用される [-as-/-ras-] 形式について、聞き手を「友人ないし同僚（対等な者）」と仮定したうえで、話題の人物が「社長ないし先生〔目上の者〕」、「（聞き手とは別の）友人ないし同僚〔対等な者〕」、「子どもないし後輩〔目下の者〕」といったそれぞれの場合に、「（話題の人物）は帰ラシたよ」と [-as-/-ras-] 形式を適用することは可能かどうかを調査した。

### 4.3.2　調査結果と分析

表 5　[-as-/-ras-] 形式の世代差

| 話題の人物 | | 目上 | 対等 | 目下 | 使用・許容ができるか |
|---|---|---|---|---|---|
| | | 先生（社長） | 友人（同僚） | 子ども（後輩） | |
| 高年層 | A | × | × | △ | 敬語として用いることはあまりない（許容しづらい） |
| 中年層 | B | △ | △ | ○ | 多少の違和感はあるが使用できないこともない（許容できる） |
| | C | ○ | ○ | ○ | 使用するし違和感はない |
| 若年層 | D | ○ | ○ | ○ | 使用するし違和感はない |
| | E | ○ | ○ | ○ | 使用はしないが違和感はない |

調査結果は表 5 の通りとなった。高年層では目上や対等な相手に用いることはなく、目下の相手についてもあまり用いることはないとされた [-as-/-ras-] 形式であるが、中年層になると 60 代男性である B は使用を許容できる程度になり、50 代女性である C においては自ら日常的に使用するため問題はないとの

回答が得られた。若年層に至ってはD、Eともに目上、対等、目下の区別は完全になくなり、Dは日常的に使用するとの回答であった。Eについてはあまり自身で使用することはないが、友人等が使用していても違和感は殆どないとした。なお話者Bについては生育地が熊本市であることが影響しているかもしれないが、少なくとも高年層と中年層以下の違いがあるのは確実である。

上記の結果から、当該地域において[-as-/-ras-]形式には多少個人差は見られるものの、明確に世代間による差がみられ、高年層では許容できなかったものが、中年層では徐々に許容される範囲が広くなり、若年層においては殆ど区別なく許容できるようになっていることがわかる。このような明確な世代間の差が起こっている現状について、京都市方言のハル敬語にみられた「尊敬語機能の希薄化、あるいは、敬意のニュートラル化」現象、簡易的に言えば「尊敬形の丁寧化」が当該地域の[-as-/-ras-]形式にも生じていると考えられる。尊敬形の方言が徐々にその機能を失くし、敬意がニュートラルになっていくことで丁寧形のような運用がなされるようになるこの現象によって、若年層に向かうにつれ目上、目下問わずこの形式の適用が許容される傾向になったのだろう。

[-as-/-ras-]形式にこのような現象が起こった要因としては、まず[-nar-][-nahar-]形式からの圧迫が挙げられる。4.1節の調査で高年層は尊敬形である[-nar-][-nahar-]形式の使用がたいへん顕著であることが判明した。これによって運用の場を失った[-as-/-ras-]形式が、世代を下るにつれて尊敬形の枠から追い出されるような形になることは十分に起こり得る。4.1節の調査での分析を踏まえると、現在の高年層における[-as-/-ras-]形式の尊敬の意味あいが薄れていることが伺える。そこから衰退、という可能性も考えられたが、調査の結果に見えるようにそれ以降の世代にも[-as-/-ras-]形式は根付いており、むしろ許容の範囲を広めている。尊敬形としての機能が希薄化したことで、丁寧形のような運用をはかることが可能になり、その位置を確立しようとしたと推察すれば、その変化の始まりは現在の高年層、80代にあたり、60代前後がいわば変化のボーダーライン上であると考えられる。

しかしながら中年層～若年層においてはそのような運用がなされているものの、インフォーマントEに見られるように方言自体が衰退してしまうにつれ、より若年層になると方言の待遇表現自体が失われてしまう可能性が示唆されている。実際、同様に4.1節の調査でみられた丁寧形[-des-]であるが、筆者の内省として若年層において動詞の終止連体形に後接し用いることは稀であり、耳にする機会も殆どなく、違和感を禁じ得ない。同様に中年層のインフォーマン

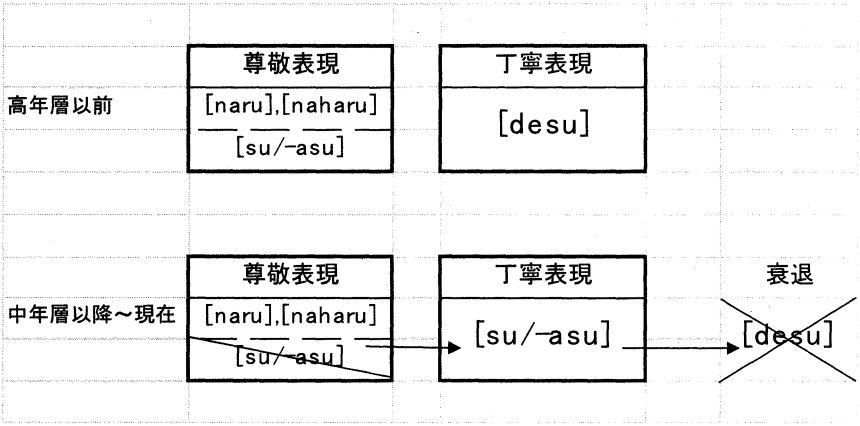
ト2名においてもこの動詞の終止連体形に後接する[-des-]形式は“自身が用いることはない”との回答がなされた。上記の通り、[-as-/-ras-]形式が尊敬形の枠組みから飛び出し、「尊敬形の丁寧化」によって丁寧形へと流れたとすれば、さらに丁寧形の枠組みが圧迫され、高年層以降、動詞の終止連体形に接続する丁寧形[-des-]が衰退の一途を辿っているのも辻褄が合う。この丁寧形[-des-]がその余波を受けることになった一因としては標準語において名詞に接続する丁寧形に同形があることが考えられる。メディアの発達等により、標準語を耳にする機会が多くなったことで当該地域の方言の、動詞の終止連体形に接続する丁寧形[-des-]は消滅していった可能性がある。

## 5. まとめと今後の課題

熊本県菊池郡大津町の方言で使用されている待遇表現の形式は[-nar-][-nahar-][-des-][-as-/-ras-]の4形式であった。[-nar-][-nahar-]形式は尊敬形として幅広く使用されており、当該地域においてこの2形式の間に敬意の高低による使い分けは見られなかった。[-des-]形式は高年層でみられた丁寧形式であり、動詞の終止連体形に後接することが特徴である。しかしながら、高年層以降ではそういった運用は見られなくなり、衰退しているようである。衰退の要因として考えられるのは、標準語「～デス」と混同されてしまったこと、そして高年層では尊敬形であった[-as-/-ras-]形式の尊敬機能の希薄化及び敬意のニュートラル化による「尊敬形の丁寧化」現象である。[-as-/-ras-]形式は第三者場面に適用される待遇表現である。発話者の心的態度、軽卑語的な意味あいが含まれる場合があることから、高年層では目上や対等な相手に用いることは許容されず、おそらく目下への待遇表現とされていた。しかし、そのことからか尊敬形としての意味・機能が薄れ、[-nar-][-nahar-]形式の影で尊敬形の枠組みから追い出されることとなった。だが、尊敬機能が希薄化したことによってか、中年層以降になると敬意のニュートラル化によって丁寧形に類似した運用がなされるようになった。これが「尊敬形の丁寧化」現象であり、[-as-/-ras-]形式は丁寧形の枠組みへとその運用の場を移行したのである。第三者指標機能は喪失していないことから、[-as-/-ras-]形式も京都市方言ハルと同様の機能を備えていると考えられるが、その点については詳しい調査を行ってはいないため言及は避ける。だが少なくとも、当該地域の中～若年層においては許容範囲を広げた[-as-/-ras-]形式が「第三者場面の丁寧形」程度の運用に移行しているのは明らかである。しかし前記の通り、この形式が丁寧形の枠へ流入したことにより、

高年層で丁寧形としての地位を確立していた [-des-] 形式は玉突き式にその枠組みから追い出され衰退する結果となった。これを図にしたものが図1である。

図1　世代間の尊敬表現と丁寧表現の変遷




以上が、今回の調査・分析で明らかとなった熊本県北部、菊池郡大津町の方言における待遇表現の使用実態である。今後の課題としては中年層と若年層の間の30～40代、または更なる若年層への調査が求められ、[-as-/-ras-] 形式が辻（2001,2002）に記述されている京都市方言ハルと同じく中心的意味機能を第三者指標機能としているのか、今回の調査では確認されなかった謙譲語が村上（1997）に記述された通り当該地域においても衰退してしまったのか等についても疑問が残った。また、[-teyar-] 形式と「テ敬語」との関係、当該地域にて「テ敬語」が残存している可能性も僅かに残っていることから、より実地的な調査が必要と言える。

注1…[　] は通常、IPA 記号を表すのに用いられるものであるが、本稿においては [-nar-] 形式といったように待遇表現の形式を表すのに使用する。

引用文献

小西いずみ・井上優（2013）「富山県呉西地方における尊敬形「～テヤ」：意味・構造の地域差と成立・変化過程」『日本語の研究』第9巻第3号　33-47

辻加代子（2002）「京都市方言・女性話者の談話における「ハル敬語」の通時的考察 ―第三者待遇表現に注目して―」『社会言語科学』第5巻第1号 28-41

藤原与一（1978）「方言敬語法の研究 昭和日本語方言の総合的研究 第一巻」春陽堂

藤原与一（1979）「方言敬語法の研究 昭和日本語方言の総合的研究 第二巻」春陽堂
村上敬一（1997）「熊本県宇土市網津町旭方言の待遇表現」『方言資料叢刊』第7巻 219-223

引用ホームページ
「大津町ホームページ」（http://www.town.ozu.kumamoto.jp/）
最終アクセス日　2017年3月30日

その他参考にした文献
辻加代子（2001）「京都市方言・女性話者の「ハル敬語」－－自然談話資料を用いた事例研究」『日本語科学』第10巻 56-79
辻加代子・井上史雄・柳村裕（2016）「岡崎における第三者敬語の位置づけ：「第三者尊敬表現」，「第三者謙譲表現」各場面のデータを中心に」『国立国語研究所論集』第11号 147-166

謝辞
本論文の作成に際して、様々なご指導を頂きました小川晋史先生に深謝いたします。また、調査の際に快く引き受けてくださったインフォーマントの皆様に感謝いたします。